

お墓を建てる

秋山 駿

浄運寺に、わたしもお墓を建てることになった。

長生きのおかげである。今日、七十八歳になるが、二、三年前まではお墓のことなど、考えたこともなかった。

東京の先祖代々の墓があるお寺の住職は、常々、わたしのことを――あれは、仏教なんて、フンだ、という顔をしている、と言っていたという。親類のなかでのわたしの評判はわるかった。

仏教が嫌いだったわけではない。ただ、わたしは、生きるのに忙しかった。幼少時に病氣ばかりしていたせい、わたしは、自分をひどく弱い人間だと感じている。生きてゆくためには、そういう自分と戦わねばならないので、いつも日々、うつつらと戦いの気分である。

十五年ばかり勤務した会社でも、あるとき同僚から、おまえの笑った顔を見たことがない、と言われた。三島由紀夫の自死に衝撃を受けてその会社を辞めたのは、わたしも何かと戦いつつ死にたい、と思ったからである。自分の文章にも、わたし

はやがて、道端で、ドブネズミのように惨めに呻きながら死ぬであろうと書いたが、冗談ではなく、作家の島尾敏雄さんにも、どうか生の惨めな意識を抱いて死んでください、と言ったりした。行軍の途中で死ぬ、という気分のなかに、お墓はなかった。

しかし、四十五歳のとき、自分の内部で、生の何かが完わってゆく、という感覚が生じた。それで、これだけは書いておかなければいけないと思つて、詩人中原中也の評伝『知れざる炎』を書いた。

その時から、死のイメージが変わった。死は、行軍の前途に不意に出現するものではなく、わたしの背後にあつて、生とともにわたしを抱きわたしを育てているものであった。

この浄運寺は、わたしの母親の生家である。母は、嫁入り道具など要らないから、その代わりに学資を、と単身上京、日本女子大の国文科に入学したのだ、という。その卒業論文が、なんと、法然論であつた。国文科だから、源氏物語や大鏡な

どの古典が中心だが、当時の女子大生らしく、夏目漱石やタゴールの小説、北原白秋や西条八十の詩集を読んでいたらしい。それなのに、なぜ法然論だったのか。

だから、わたしは長い間、仏教に心を向けなかったことを、母親に対して後ろめたく感じていた。

法然のことは、従兄弟である小林覚雄住職がいろいろ教えてくれた。法然上人の『御詞』の書抜きや、あの『大菩薩峠』の作家である中里介山が著した『法然』を、送ってくれた。

これは、真情のこもつた良い本であつた。書く人の心の熱気が伝わってくる。

〈日本において、本当に一宗教を創立したものは法然のほかにない〉
と言ひ、また、

〈日本において法然ほどの革命家はない〉
と言う。つまり、それまで貴族階級の手の中にあつた仏教を、われわれ平凡な人間の生活の中へ、日常の中へと、取り戻してくれたのだ。なるほど、これは根本的な革命だ。

仏やお墓について、わたしが思いを至すようになったのは、家内の病気からである。帯状疱疹後の神経痛というの、なかなか難病で、いく

ら病院を換えても、ひとつも良くならない。

この三年ばかり、ただ痛い、痛いで過ぎ、時に助けてくれと言ふ。こんな苦痛に、生のどんな意味を見出したらいいか、と思つているうちにふと、あの言葉が浮かんだ。

〈善人のおもて往生をとぐ。いはんや悪人をや〉

善人を健康人、悪人を病人、と置き換えれば、よく分る気がした。病人を救ってくれるのでなければ、仏様など、要らない。

わたしが建てようとする墓地の前に、中野孝次さんの墓がある。彼の意思をそのまま形にしたお墓で、それは好い感じがする。

彼は、墓を造る前は、わたしに向かって、散骨にするから、おまえに頼む、などと言つていた。わたしは反対だった。

ゴーガンの絵に、〈私達は何処から来たか、私達は何か、私達は何処に行くか〉というのがあるが、この言葉は、生の神秘の結晶である。

散骨、などと言う人は、死を前途に見て、何処に行くか、ばかりを気にしている。それより、何処から来たか、を振り返らねばならぬ。背後から来る死は、実はその何処から来るのだ。元の大地へ還るために。

(文芸評論家)